

報告：先史学における低湿地遺跡革命（先史学会定期総会）

1. 学会への参加

先史学会 (The Prehistoric Society) は、定期総会を 1991 年 4 月 5 日から 7 日までエクセター大学で開催した。この総会の統一テーマは、「先史学における低湿地遺跡革命」で、エクセター大学に本拠をおく「低湿地考古学研究プロジェクト」(Wetland Archaeology Research Project; 通称 WARP) が中心となって企画、運営を行った。筆者は文部省在外研究員として、この総会で日本の低湿地遺跡の現状について発表を行ない、引き続きアイルランドの低湿地遺跡の見学に参加できた。以下、簡単にこの学会の印象について紹介させていただく。

参加者は約 200 人で英国、アイルランド、西欧が中心で、北アメリカ、イスラエルから数人、日本からは筆者 1 名とケンブリッジ大学の留学生 1 名が参加した。また、参加費が高いせいか学生の参加は少なく、年齢層は高かった。参加者の専門分野は大部分が考古学、先史学であるが、地質学、花粉、年輪年代、昆虫、寄生虫などの分野の参加も見られた。

口頭発表は大講堂で行われ、演題は 16 本、時間は各約 40 分、その後、討議が 15 分とたっぷりあった。別教室ではポスターセッションが行われ、筆者はその両方で発表を行った。筆者のスライドを使った滋賀県粟津湖底遺跡、埼玉県寿能泥炭遺跡、河内平野の弥生遺跡などの発表は、これまで紹介されることの少なかった日本の大規模発掘の紹介を中心として、参加者の多くに驚きを与えたようである。

2. WARP について

「低湿地考古学研究プロジェクト (WARP)」とは、ブリテン島の南西部、サマセット州のサマセットレベルズの調査を長年手がけてきたケンブリッジ大学の考古学者ジョン・コールズ博士と夫人のブレンニー・コールズ氏を中心となって、1986 年に設立した研究会で、低湿地遺跡において多面的な研究を推進することを目的とするものである。会員はイギリス、アイルランドを中心とし、第四紀学の研究者が現在 200 名余り参加している。また、この研究会は、他国の発掘の費用調達にあたってヨーロッパ社会基金 (Europe Social Fund) を得るために奔走したり、後述するポーランドのビスクピン遺跡の調査にも援助を行って、世界の低湿地研究の中心になっている。また、情報交換のために“News WARP; Newsletter of the Wetland Archaeology Research Project”を定期的に発行している。

3. 口頭発表から

特に印象に残った発表には以下のようなものがある。

(1) ビスクピン (Biskupin)

ポーランド北方の同名の湖の湖畔に営まれた防衛的な性格をもつ鉄器時代の集落である。C-14 年代では紀元前 500 年ころのもので、急激な湖の水面上昇によって廃絶されたものである。1937 年の渇水期に初めて発見、調査されポーランドにおける最初の考古学と自然科学との共同調査になった。この集落はもともと湿地の上に営まれ、建物の床、道路をはじめ、集落全面に豊富な木材を敷き詰めて水位の上昇と戦っていた。集落全体が急速に水没したため、有機遺物が豊富に残り、集落の全容とその文化内容が復元可能である。保存条件に恵まれたお蔭で、この集落の維持、農耕、土器作りなどの日常労働に実際、どれくらい時間が割かれたかなどの推定がされている。

(2) ウインドオーバー (Windover)

フロリダ州の内陸部の湖沼地帯にあるこの遺跡は、アルカイック期 (約 7000 年前) の祭祀的な色彩の強い遺跡で、160 体もの多くの埋葬遺体が発掘されている。この埋葬は、浅い沼沢地にはりだしたプラットホーム上から布にくるんだ遺体を水中に沈めたために有機組織がよく残り、埋葬遺体のうち、90 体には脳の組織がそのまま遺存していた。多くの丸木舟や鳥や人の彫刻の施された墓標なども発掘され、この時期の高い文化内容が明らかにされつつある。

(3) アイルランド低湿地遺跡

アイルランドでは、国土全体の 16.2%、134 万ヘクタールが泥炭で覆われている。この泥炭は燃料として昔から切り出されてきたが、近年、火力発電の燃料として採取されるようになり、以前とは比べものにならない面積の泥炭層が切り出されている。こうした泥炭地のそばに住んだ人々は、先史時代以来、多く

の木道をつけて行き来していた。近年の大規模な泥炭の採取は、まず、何万ヘクタールにもわたって表土を剥ぎ、次に泥炭を乾燥させるために、20メートルおきに幅約1メートル、深さ1.5メートルの排水路を平行して掘削して、機械によって切り取っていくものである。こうした排水路の断面に沿って歩くと、木道が切断されているのが観察できるのである。アイルランドでは1980年代の後半になってようやくこのような泥炭遺跡の調査が行われるようになり、現在ダブリン大学のなかにアイルランド低湿地遺跡調査会が設立され、国内の泥炭地の調査を続けている。その結果、湿地を横切る木道100本以上、丘陵地の縁辺に木柱で防御された青銅器時代の集落などを検出している。木道は最古のものが前3000年紀で紀元6世紀以降のものまでさまざまな時期にわたっている。木道の型式は、最古のものが太い枝を並べただけなのに対して、時代が新しくなると枕木のような材の両端に孔を穿ち、そこに杭を打ち込んで固定するタイプに分けられる。

(4) サマセット州の調査

この遺跡はイングランド西南部、サマセット州にあり、19世紀の末、この地方に豊富な泥炭の採取中に木道が発見されていた。1973年以降はジョン・コールズが中心となって調査を継続することになり、さまざまな分野の研究者が参加した世界で最も進んだ研究を行っている。この遺跡では前3500年頃から木道の建設がはじまり、紀元前後になると低湿地のなかにも住居を構えるようになった。居住面からは大型草食動物の糞を餌とする甲虫がみつかり、この地方で家畜が飼われていたことを明らかにした。花粉分析の結果は泥炭地の近くの乾燥地では森林の伐採が進みつつあったことも示しており、この種の遺跡の最高水準の研究が行われている。

4. 低湿地遺跡の将来、日本との関連において

低湿地遺跡 (Wetland site) の発掘は、乾燥状態の遺跡 (Dryland site) の発掘に比べて費用も手間も何倍もかかる。それでもその見返りは乾燥遺跡の比ではない。今回の発表では、ポーランド、リトアニアなどで調査研究費用の不足が嘆かれていたことと比べると、日本はまだまだ恵まれていてと感じさせられた。しかし、考古学、先史学が地質学、古生物学のなかから生まれてきた歴史をもつ西欧の共同研究に比べると、日本の発掘は、ともすれば有機遺物を「自然遺物」と呼んで、考古学の研究対象とはせず、専門の研究者に「切り売り」して、報告書の付編としてのせれば良しとするところがある。

日本の低湿地遺跡の調査で最も遅れているのは、昆虫遺体の研究とダニや回虫などの寄生虫の研究などであろう。たとえば寄生虫の研究は、当時の人々のすんでいた居住環境、衛生状態について大きな手掛かりをもたらしてくれるし、ダニの種類によって、家畜小屋か人間の居住かの手掛かりにもなる。一日も早くこうした共同研究が日本でも定着することを願うものである。

低湿地遺跡研究プロジェクトの連絡先は以下のようである。

WARP, Fursdon Mill Cottage, Thorverton, Devon EX5 5JS, ENGLAND

(松井 章)

書評：先史モンゴロイド集団の拡散地域の古環境データベース—文献情報資料集(4), (5)

平成2年度および3年度の文部省科学研究費補助金(重点領域研究：先史モンゴロイド)先史モンゴロイド集団の拡散地域の自然環境(第四紀学)班の研究結果報告書として下記の2冊が本年刊行された。これらは本誌第6号で紹介した(1)~(3)の続編である。いずれも非売品であるが、編者に相談されれば入手が可能なものもあるかもしれない。

(4) 福田正己編。ベリンジアの古環境に関する文献集。142pp.

(5) 米倉伸之編。アジア極北地域・北アメリカ地域における最終氷期以降の古環境に関する文献。316pp.

(4)には「Palaeoecology of Beringia. ed. by Hopkins *et al* (1982)の抄訳を中心として」という副題がつけられている。すなわち、編者の福田氏をはじめ北海道大学環境科学研究科の方々の輪講の結果を、文献資料として益するように抄訳され、必要に応じて図表が付けられている。最後に日本で出版されたシベリアの永久凍土についての文献がそのまま掲載されている。(5)は主に最終氷期以降の古環境に関する重要な文献18件から時期区分・氷河・海面・植生などの記事と図表が盛り込まれている。

(辻 誠一郎)